

令和2年度 第1回芦屋市立美術博物館協議会 会議録

日 時	令和2年8月4日（火） 14:00～16:00
場 所	芦屋市立美術博物館 講義室
出席者	<p>会 長 藪田 貫 副会長 岡 泰正 委 員 飯尾 由貴子 委 員 中島 幸夫 委 員 若林 敬子 委 員 安部 太一郎 委 員 岩井 恵子 委 員 星野 剛一</p>
欠 席 者	<p>なし</p> <p>（芦屋市立美術博物館指定管理者） 館 長 石井 茂（株式会社小学館集英社プロダクション） 学芸員 室井 康平（株式会社小学館集英社プロダクション） 学芸員 尹 志慧（株式会社小学館集英社プロダクション） 株式会社小学館集英社プロダクション 浅野 智恵 株式会社小学館集英社プロダクション 池野 美佳 グローバルコミュニティ株式会社 青木 大介</p> <p>（事務局） 社会教育部長 田中 徹 生涯学習課長 長岡 良徳 生涯学習課係長 竹村 忠洋 生涯学習課 石田 直也 生涯学習課 松本 淳子</p>
事 務 局	生涯学習課
会議の公開	■ 公開
傍聴者数	0 人

1 会議次第

- (1) 社会教育部長あいさつ
- (2) 委嘱状交付・自己紹介
- (3) 報告
 - 1) 令和元年度事業報告について
 - 2) 新型コロナウイルス感染症対策について

(4) 議題

- 1) 展示状況について
- 2) その他

2 提出資料

- 資料1 会議次第
- 資料2 委員名簿
- 資料3 新型コロナウイルス感染症対策に係る経緯について
- 資料4 芦屋市新型コロナウイルス感染症対策芦屋市立美術博物館利用ガイドライン
- 資料5 芦屋市立美術博物館2019年度事業報告書
- 資料6 芦屋市立美術博物館2019年度展覧会動員実績
- 資料7 芦屋市立美術博物館2019年度入館者数内訳
- 資料8 芦屋市立美術博物館 新型コロナウイルス感染拡大防止対策
- 資料9 令和2年度 歴史展示資料室 展示の概要・計画
- 資料10 「芦屋の歴史と文化財」展

3 審議内容

(藪田会長)

それでは、始めさせていただきます。新型コロナウイルス感染症対策にできるだけ気を付けて、会議を開催したいと思います。それではお手元の資料に沿って、まずは報告からお願いしたいと思います。

(石井館長)

それでは令和元年度の事業報告をさせていただきます。

..... 〈令和元年度事業報告の説明〉

(事務局：長岡課長)

続きまして(2)新型コロナウイルス感染症対策について事務局の石田から説明させていただきます。

(事務局：石田)

..... 〈新型コロナウイルス感染症対策について経緯の説明〉

(事務局：長岡課長)

続きまして、石井館長より現在の新型コロナウイルス感染症対策についてご報告をさせていただきます。

(石井館長)

…………… 〈現在の新型コロナウイルス感染症対策についての説明〉 ……………

(藪田会長)

ありがとうございました。展覧会としては成功例と失敗例と両方があるのですね。全体としては35,000人ほどですか。何かご意見はありますか。

(若林委員)

スポーツ展というのがとても楽しみだったのですが、こんな方も紹介できるよとかいろんな情報を石田さんにも提供させて貰って。室井さんにもね。残念です。来年出来たらいいのですけど。ほんとに芦屋にはスポーツで素晴らしい功績を残された方がいらっしやって、結構ゆかりのある町なので、これもやれたらいいなと思います。

(石井館長)

芦屋市ゆかりの方がたくさんいらっしやるので、皆様と打合せをさせていただこうと思っていたのですが、こういう時期なので、面談が難しいというのが大きな原因です。

(若林委員)

オリンピックに重ねて盛り上げようというところがちょっと盛り下がったので、それはしょうがないですね。次にあるのは「芦屋の時間」展ですね。これは、先日もご案内いただいて、チラシを拝見しましたがとてもよくできているなと思いました。これに対する意気込みというか、抱負をお聞かせ願いたいのですけれど。このチラシの裏を見たら、「どこにあるかご存じですか？」で始まるでしょ。これ、すごく正直でいいなと思います。でも実際には魅力的な作品をたくさん持っていらっしやると思うのですよ。だから、これに対して何か意気込みがあれば。あと、今の藍のファッション展、少しボリュームが少ないかなと思います。一点一点すごく魅力的なものがありますけれども、800円取るには、ちょっとボリュームが少ないかなって思いました。この展覧会が始まった当日見せてもらいましたけれども、そう思いました。とりあえず、「芦屋の時間」展に対する意気込みを聞かせてもらえればと思います。

(石井館長)

「芦屋の時間」展はチラシにもあるように、「収蔵作家全員集合」ということで、いわゆる収蔵作家の全ての方の名前がここに書いてあります。もちろん全ての作品が展示されるわけではないのですが、この美術博物館が収蔵している作品が、これだけあると。全員の方の作品を1点以上展示することになるので、点数は150点以上となり、通常でしたら壁に一枚ずつですけど、上下に二重になったりと、ボリュームがかなりあります。美術博物館所蔵の館蔵品をたくさん見て頂ける、そういう意味では意義が大きいかなと思います。

(若林委員)

期待しています。

(安部委員)

去年の7月13日から開催していた「こどもとおとな これなににみえる」展を家族で行きました。子どもは小学生ですけれども、非常に楽しいと言っていました。というのは、ボンドを使った作品であるとか、結構近づいて見ることで「こんな学校でやったことあるわ」とか、子どもの視点で見て面白いということ、結構息子たちも言っていて、子ども向けのワークシートもありましたし、解説にルビもあるから、良かったのだと思います。今回の「芦屋の時間」展でも子ども向けのワークシートとか、子どもにわかりやすい解説みたいなのを付けて頂いたら、子どもが楽しんで見る展覧会になるかなと思います。

(星野委員)

藍のファッション展は、「こどもとおとな これなににみえる」展の展示と比べると、失礼な言い方ですが、モノを並べてあるという感じがしてしまいました。「こどもとおとな これなににみえる」展では、良い点(改善点)があったのに、今回の展示には反映されず、折角の良い点が継承されていないのが残念だなと思いました。

(石井館長)

今回の展示は企画会社が入っています。「チェコの絵本展」というのを何回かやりましたが、その時と同じ企画会社と一緒にやっています。

(星野委員)

ということは、美博の学芸員さんが意見をはさむような余地はないのですか。

(石井館長)

あるにはありますが、企画会社の考え方の要素が大きいので、工夫はできますが、メインになるところが企画会社の企画に沿った形になります。

(星野委員)

せっかくの美術博物館の学芸員さんの力量が、展示に反映出来ないと勿体ないし、レベルアップもしないと思いますので、よろしくお願いします。

(若林委員)

映像が流れていましたよね。内容忘れちゃったけど、どんな映像でしたか。

(尹学芸員)

つくもを生産している福島の紺屋取材して、今回出品しているブランドさんが藍染をしてコラボするので、そのあたりをドキュメンタリー形式にして流しています。

(若林委員)

あそこにもちょっとした椅子があったらいいなって思いましたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から難しいのかなと。

(石井館長)

椅子自体はありますが、感染拡大防止の観点から撤去しています。設置するか悩んだところなのですが。

(若林委員)

ちょっとああいうところってゆっくりと見たいですね。

(藪田会長)

新型コロナの影響がすでに令和元年度終わりのころからありますけれども、それぞれの博物館がこの問題を共通して考えておられるので、その辺も含めてお話いただければと思います。例えば、ズームまたはオンラインで見せるということにかなり力を入れられている館もある。コロナがあっても、コレクションがあるので見せると。これから先、博物館全体が「人が博物館に来て見る」というスタイルと、「オンラインで見る博物館」という2ウェイの方針に変わっていくと思います。芦屋の場合どのようにそれをされていくのか、ちょっと方針としてお考えされておかれたらいいと思います。「やめる」か「実施する」のかじゃなくて、形を変えて実施するという、例えばスポーツ展のようなのをやった時にコロナで来館できないなら、止めてしまうのか、形を変えて実施するのか。おそらく今年の後半から来年に向けて考えとかなないといけない。

(岡副会長)

小磯記念美術館も休館になりました。新型コロナが感染拡大しだしたころ、周りの館が休館に移行している中、少しの期間開けていましたが、緊急事態宣言を受けて閉めました。新型コロナでも開けている美術館として日経新聞にも取り上げられましたが、それはお客様が来られなくても清掃や警備さん含めて、スタッフが働いているので、まったく閉めてしまうと雇用の確保もできないということなので、できるだけ開けようと市長に伺いをたてて、ゴーサインがもらえましたが、緊急事態宣言によって結局は臨時休館せざるを得ませんでした。それで、その間どうするかということで、リモートではありませんが急遽手持ちのハンディーカメラで、陳列はされている状態ですのでそれを見せようと、解説を学芸員がしながら回るということをやりました。ハンディーカメラで撮ってすぐSNSで流すという感じでやりました。ただ、美術館の問題で著作権が発生します。展示室をざっと、作品が並んでいるのはわかるけれど作品鑑賞は出来ないように撮影しました。鑑賞できるように撮影しようと思えば出来ますが、著作権料が発生するので。博物資料は問題ないと思いますが、美術資料はそういう問題点があるということを一一般の方はご存じない。どうしてこんなに作品を遠くから映しているのかと。ですので、これとこれとはアップにしますと著作許可をとって、それはアップにしましょうと、2点3点を選ぶということをやりました。時間をかけて上手にやるのではなくて、手が震えていても大丈夫、即効性が大事という思いでやりました。それは市立の美術館だからできたことです。これが県立博物館、国立博物館だったら難しいです。クオリティーがね。小規模の美術館でないとやれないことです。一番は早くやるということ。こういうことで発信する。それから、コンサートはできないので、東京でコンサートをやってリモートで映像を見せるということをしています。とにかくその状況に合わせてすぐにやるということしかない。ただ、どこの館も大型の展覧会、一日3千、4千人入る展覧会などは結局できませんでした。結局、お客様がたく

さん並ぶような展覧会はできないのですよ。コロナのあと、少なくともワクチンができるまでは。私どもの小磯美術館も結局こういう状況でしたから、まったく人が来ません。来られても近隣の方です。それから、ベイシエラトンにお泊りになった方、今は日本の方で高齢の方が多いですけども、ご夫婦、ご老人の方が来られてゆっくりご覧になった方が、貸切りみたいになっていますから、良かったと言われます。それでも開けておこうと。そんな状況なので、今日朝出てくるときでも、観覧中のかたは3人とか言っていました。最終的には50人くらいになるかな。ですけれども、今日から喫茶部を開けました。喫茶部は、ちょっとしたことですけど、コーヒーとか紅茶を提供しました。利用者は、割合的には多いですね。そんなような状況です。ご参考までに。一番言いたいのは美術作品には著作権問題が発生することですね。きちっとしたことをやると、映像表現ということになってしまいます。

(飯尾委員)

わたしたちは岡副会長のように機動力は発揮できておりませんで、動画での配信がまだこれからです。SNSやホームページでこんな展示をやっていますよと、こまめに更新して公開したりはしていました。あと致命的だったのは、学校団体との連携で小学校・中学校の方の団体鑑賞が全てストップしてしましまして、その部門のスタッフがかなり気落ちしてしまいました。非常に残念なことだったかと思います。私どもも、6月2日からコレクション展を開催しましたが、いつも来てくださるお子さんの団体が来られなかったということで、非常に痛手でした。ただ、今は教育部門の職員が中心となりまして、学校向けに動画の教材を今制作中です。もうすぐ動画ができるようですのでそれを活用していただくように案内をしようかと思っていますところです。

(藪田会長)

それは何本かテーマを決めてやられるのですか。

(飯尾委員)

そうですね、作品についてミュージアムティーチャーが語りかけるような形で、それを学校の教材で使っていただくようなイメージで。

(岡副会長)

著作権処理はしているんですよね。

(飯尾委員)

はい。教材なので、学校限定配信ということで。

(星野委員)

すみません、今の著作権の話ですけども、館蔵品にもかかるのですか。

(岡副会長)

もちろんです。

(星野委員)

買い取ったりしている館蔵品にもかかるのですか。

(岡副会長)

かかります。所蔵権と著作権とは別のものです。

(星野委員)

歴史の文化財はどうですか。

(岡副会長)

全然問題ないです。

(星野委員)

他の市から借りてきた歴史の文化財は、どんな扱いになるのですか。

(岡副会長)

それも、著作権そのものはないです。

(藪田会長)

ただ、うちは今アマビエを展示していますけど、会場を映して展示全体の風景を見せるのはいいですけど、アマビエをフォーカスしたいっていうのは、テレビ局の方からきましたけど、許可を取ろうと思っても京大は駄目でした。それは何故かという、我々は展示のために貸す・借りるという約束をしているわけで、それだけをクローズアップするということは契約としては取り決めてないわけですから、新たな条件が付けられることになるんですね。

(岡副会長)

著作権者は一番最初にアマビエを描いた人ですよ。所蔵権を主張しているのですね、貸出条件でね。

(藪田会長)

そうですね。例えばNHKの番組やテレビ局としては普通だと思います。日曜美術館なら大きな作品をフォーカスするのは当然だと思うので、そういうことが前提なら、借りるときにそういう契約をしておくのですが、今回はしてなかったの。しかし、にわかには評判が高くなって映したいとなったときに駄目になったわけです。

(石井館長)

いずれにしても、学芸員の事務的な仕事の中で著作権処理というのは結構たくさんあるのは事実です。それでも著作権者がお亡くなりになったりということもあって、事務処理に時間がかかるのも事実です。

(星野委員)

文化財や歴史展示の部分に、フォーカスして発信するのは、問題ないということですね。

(石井館長)

5月には今の展示の動画などもツイッターで発信しています。そして、次の展覧会ではユーザーをつかった情報を早めに発信していこうということで、今後、講演会で人を集めるとか、イベントで人を集めるのがなかなか難しいので、いろいろ工夫しているところです。

(岡副会長)

私が言っているのは、臨時休館の少しの間、陳列がもったいないから、かわいそうだからご紹介する、「コロナ禍が明ければ」「自粛が開けたら見に来てくださいね」という「告知」なので、方向性がちょっと違うと思います。その動画で作品を鑑賞できるって、そんなものではないので。デザインなんて近づいてみないとわからないし。そこは、そもそも来館者誘致のための、コロナという非常事態に対する対応という気持ちでおりますからね。それでお腹一杯になるはずがない。「展覧会告知」と「自粛が開けたら来てください」という、インビテーションのつもりで考えた方がいいと思います。美術館は本物でないと大きさもわからないし、質感もわからないし。抽象表現なんて本物見ないとわからない。ついでに先ほどの話、私は美術館の人間として、「こどもとおとな これなににみえる」展の時に、こども向けにはそれでいいと思う。ワークショップとしてはいいと思いますが、大人に向かってはその所蔵品の抽象表現ですね、どういう経緯でどんなものが生まれてきたか、非常に暴力的なものもあるし、非常にデリケートな優美なものもあるし、それを大人が鑑賞するとして両輪が必要だったと私は思っています。あの展覧会を見たときに、やっぱり強烈なものを提起される、衝撃みたいなものがあるので、それは「どういうつもりでこの作家は、この絵を描いたんだ？」みたいな説明も必要だと思います。何故こういうものを描いたのか、その時代の本人の動きがこうとかですね。子どもさんには抽象表現と純粹に造形的に向き合うという機会を与える。両方できるはずなので。そうすると、美術ファンが来ても満足できるし、子どもさんをお連れになって展覧会に接しても、初めての体験、ファーストコンタクトを喚起することができるというか、それについてのヒントを与えることができる。「入門」と「歴史的な位置付け」というか、そういうことが必要だったんじゃないかなと思います。ちょっと、物足りないんです私としては。ワークショップだけになっちゃっているから。今の展覧会にもちょっと思うところがありますが、それはちょっと置いといて。

(藪田会長)

2019年でいうと芦屋市造形教育展が9日間しかやっていないのですが、動員数が素晴らしいですね。

(石井館長)

学校さんが団体でいらっしゃいますし、ほとんどの親御さんも来られるということで、毎年ほぼ同数の人数で推移しています。

(藪田会長)

これは毎年やっておられるけれど、来年コロナ禍だったらどうされるんですか。

(石井館長)

学校との兼ね合いもあるので、現在結論が出ておりません。

(安部委員)

造形教育展は、市内の幼少中の作品が集まって来ますけども、例えば小学校で8校ありますが、8校で図工展というのを毎年開催していて、その後にこの美博で全体の展覧会という流れなのですが、今その大きい会場とか、今まで体育館とかで作品展をしてきたものが、このような状況なので、規模を縮小するような形でそれぞれの学校でやっていこうと。まず、図工展というのはなかなか難しく、参観も出来ない状況ですけども、そのような状況でも保護者の方に見てもらい、まずは学校の中でどうしていこうかという状況です。なので、来年の造形教育展に関しては、これから検討していかないといけないという状況に今あります。

(藪田会長)

もうひとついいですか、飯尾委員。海外からの借入れなのですが、今、歴史博物館ではオランダのライデン国立民族博物館から作品を借りているのですが、コロナ感染の影響で、返すにも向こうのキュレーターが取りに来られないので、映像で我々が撤収しているところを同時中継して、ライデンの人に確認してもらおうという形になっています。そこで今後、海外の作品を借りるというのは相当難しくなると思うんです。国内の巡回展というのは、余り問題なく今のところできているんですか。

(飯尾委員)

そうですね、国内に関しては特に。私共も6月から最後1週間だけ開催した展覧会も借りて返しに行きましたので、今は、国内の移動はあるのですが。

(岡副会長)

それも各市で違う。神戸市の場合は、ついこの前、神奈川に交渉に行きまして、神奈川から新幹線乗って帰ってきたら2週間自宅待機でした。その間、学芸員の仕事ができない。もちろん家でパソコンを使って仕事できますけど、出勤してはいけない。だから、実際そういうことが起きているので、借用交渉して帰ってきて2週間完全に止まるので東京方面に入らない。東京方面を通過しない。輸送でも東京方面の集荷をやらない、とそういう状況にあります。だから、実際には新型コロナの影響はものすごく大きいんですよ。交渉もできないし、海外の場合で先ほどの話でいうと、今度クーリエ（随行学芸員）って存在が不要な存在になってきて、それはかえって自分たちの首を絞めることになるんじゃないのかっていう問題も出てきた。コロナの課題は美術館、博物館にとっては輸送の問題とか難しい。初めての経験ですから。

(藪田会長)

私どもの博物館もそうですが、今までと同じように同じ人数を集めるというのは難しい。そこは、市の事務局側にはしっかりと認識してもらわないといけない。そうじゃないと運営される博物

館が苦勞する。数字には表れない影響があると思います。

では報告事項はこの程度にしまして、次に議題（１）展示状況について、事務局から説明をお願いします。

（事務局：長岡課長）

議題（１）展示状況について、ご協議いただく前に今回の議題趣旨、展示趣旨について説明させていただきます。

…………… 〈事務局（石田）議題趣旨の説明〉 ……………

…………… 〈室井学芸員 展示の説明〉 ……………

（藪田会長）

ありがとうございました。実際に展示をご覧いただいて、何かご意見ありますか。

（岡副会長）

私は先々週の土曜日でしたか、拝見しました。神戸新聞にも取り上げられて、水車絵図のこともありましたし。率直な感想は、どこに、誰に見てもらおうつもりで展示しているのかなというか、年配の人が見る、読むような解説文であれば、展示ケースの後ろの方にある物は見えない。私なんか見えないですね。もちろん単眼鏡で見ればわかりますけども。子どもに向けて、例えば小学校高学年、中学生ぐらいに向けてだったらちょっと難しいっていう感じがあるので、ちょっとついていけない感じですね。私としたら、昔の博物館の展示という感じです。もう少し資料を間引いてわかりやすく、読めないものに関しては、自分がケースの外に出て、読めなければもっと大きく拡大するなり、別のところに展示するなりしたほうが良いかなと。「のぞきケース」も一つしかなかったですからね。展示の制約がすごくあるのはよくわかったんですが、見せられても見えなかったら、余計に不満になりますよね。私の眼では読めないって。子どもに対してか年配に対してか、僕は両輪でいいと思いますよ。学校の先生方の視点というか、かみ砕いた文章でもっとここは伝えたいとか、水車絵図にしても、ここが面白いという一般向けのスポット解説がない。わかる人しかわからないというか、プロしかわからないみたいな感じですね。もっと子どもにわかりやすくすれば、おじいちゃん、おばあちゃんだって、そんな知識がなくてもこれはすごいものだなど、こういう絵図が残っているのかと。そういうことで、もうちょっと間引いて絞って、特化した展示をすればというか、第三者の、その学校の先生方かどなたかのアドバイスと学芸員とが両輪でやればいい。我々はそういう風にしていきます、美術の場合はね。指導主事と学芸員が相談しあって、子どもにわかるかなということを言いながら相談しあって両輪でやるんです。やっぱり両輪でやらないと、ターゲットが見えないということが率直な感想でした。資料をたくさんお持ちで、いいものもたくさんあるのですが、展示スペースはあれだけですので、全部やれと言われても大変だと思います。ですけど、もうちょっとやり方はあるんじゃないかというのが率直な意見です。資料をたくさんお持ちなのはよくわかったし、頑張っておられますね。ただカタログか何かで、もう一度家に帰って見られるかという、そうではないんですね。そこで完結してしまう。ちょっと僕としては、うーんという感じ

です。頑張っているけど、もうちょっと工夫いるよね、というのが感想です。

(藪田会長)

星野さん引き続きどうぞ。

(星野委員)

私自身は、水車絵図をじっくり見ると、水車のあった位置もイメージ出来、知っている地名も登場する事から、ゆっくりと現地散策してみたいとか、ほかの絵図も見てみたいとか思いました。又、展示されている古文書を見て、どんな風にかけてあるのだろう？読めたら良いなあと思いました。私以外にもそんな思いを持たれた方もおられると思うし、又違う切り口で、絵図とか古文書に興味を持たれた方もおられると思います。少し難しいですが、見る人にここが面白いポイントだよと気付かせるとか、もうちょっと興味を引くような見せ方とか、更にその興味を増幅するような展示の工夫が欲しいなあと思いました。更に、歴史展示室は、芦屋の子ども達にとって、芦屋の歴史を学べる唯一の場所です。生涯学習課も美術博物館も、子どもに伝える役割、責任は担っておられると思いますので、お互いに良くキャッチボールして、今の展示のままで良いのか？一度、点検して戴ければと思います。

(安部委員)

先ほどから子どもの話が出ていますけども、今日学校を出るときに担任の先生に聞いてみました。というのは3年生で芦屋の市内巡りをしていて、美術博物館にも来て勉強したりもしますけれども、子ども達と来た時に、どういうことを感じられますかと。私は、担任ではないので担任の視点でも聞いてみたんですね。そしたら内容的にも難しいことが多いということがあって、例えば3年生の子が主に来るから3年生対象の内容を展示するとか、そういうふうな感じで、子どもがわかりやすいような展示をしてもらえたら、子ども達の見の気持ちというのも変わってくるのではとおっしゃっていました。あと、谷崎潤一郎記念館とか高浜虚子記念館とかあるので、そういうところとの繋ぎ、連携での展示、子どもはそういうところがわからないと思うので、そういう記念館もあるよということも一緒に展示することも出来るんじゃないかなという話も今朝聞いてきました。先ほど、新型コロナで触ることができないとおっしゃっていたのですが、もっと展示ケースの前のスペースを使って、例えば山手小学校に昔の消防ポンプなんかがあったりするんです。そういったものとか、浜風小学校にも昔の道具とかあったりするんで、それは学校で見ることができるので、ここでしか見られないもの、美博だから見られるというものを前にどんどんと置いて、触ることができるもの、体験できるようなコーナーもあつたらいいかなという話もしました。内容のことになりますけれども、鶴の伝説であつたりとか、打出の小槌とか、子ども達は妖怪が好きですから、そういった内容の芦屋の歴史、戦国武将がこうしたとか、いろんところがあつたりするので、そういうところに関連付けた内容であれば子どもたちは、もっと見たいなと感じると思います。最後にこの「芦屋の未来遺産」の冊子というのが小学校で配られています。これを開けてみたらいろんなことが紹介されていますけれども、子ども達が手に取って行ってみようかなという感じになるには難しいかなと思います。3・4年生で配られて授業すると思いますけど、こういう状況で回れないこともあるので、回れない時期だからこそ、芦屋でこういう遺跡や場所があると、ゴロゴロ岳とか子どものころ聞いたことがあるんですけども、説明を読んでそうなんだと、はっと思うようなことを書き

ていたりするので、せっかくこういうものがあるので、活用して子どもと一緒に学習できるような場づくりができればと思います。以上です。

(若林委員)

その冊子を展示室に置いておくとか、そういうこともされたらどうですか。今日、拝見してパネルを新調されたとおっしゃっていたけど、「あっ新しくなったな」と思いましたよ。中に赤字なんかも対応されていてね、工夫されているなど感じました。いつも感じるけど、遺跡部分はすごく写真も多用されていて面白いんですよ。ただ、遺跡のピンポイントの写真じゃなくて、周りの、個人情報になるのかもしれないですけど、遺跡のある周りの写真なんかも展示されていたら「あっここに遺跡があるんや」とわかっていいかなと、面白いかなと思います。遺跡だけの写真ではなくて周りの風景を同時に展示されたらどうかと思いました。あと、縄文に始まって弥生、ずっとそういう風な流れで日本史って勉強するでしょ。それなら、帯にして展示ケースの上に、何何時代とかを追っていってもらって、この時代がこの辺なんやとわかるような、多分今は日本史の教え方はそうだろうと思うんですよ。私は現代から遡った方が面白いかなと思います。今があるのは過去にこういうことがあったから、その流れでこういう風になっているんだ、というようなことを教える方が。帯のようなものを付けて、日本のこの時代にはこうなると、芦屋はこんなだったんだよと。芦屋の歴史の中で外せないのは、震災もあると思います。それも写真でもいれてもらってもいいかなと思います。パネルのことですけど、本文中にもルビを振ってみたらどうでしょうか。小学3年生にも難しい漢字も入っていると思うので、本文中にもルビをつけてみたらどうかと思います。でも今まで、この協議会で委員の皆さんからいろんな意見を受けて、だいぶ反映されていますよ。数年前に比べたら、格段に進歩していると思います。安部委員から意見をもらい、私もここで言わせてもらい、それを反映してくださっているんで、それは嬉しいなって思います。それと、芦屋廃寺跡の礎石、あれはこの敷地に移設されているってありましたが、どこにあるんですかね。

(石井館長)

入口の、喫茶店の前ですね。

(若林委員)

ほんとですか。何度来ても「これか」と見たことがない。改めて見てみます。

(石井館長)

入口のところにあって、解説パネルも設置しています。

(藪田会長)

ありがとうございます。では、中島委員どうぞ。

(中島委員)

芦屋の特徴って何ですか。この美術博物館でこんなことがあるよという、訴求ポイントがあったらもっと引き付けるのだと思うんだけど。失礼な言い方かもしれないけど、ただ展示してあるだけって言うだけじゃないでしょうか。あそこに行って来たらこんなものがあったよと。例えば、芦屋

を紹介する、展示で置いているだけじゃなくて、芦屋をイメージアップして、「さすが芦屋」って、「芦屋」ってこんなところなんだよという風なイメージを持つような美術博物館にしたら、お客さんも来てくれるんじゃないか、集客力にも役立つのじゃないかと思うんです。アピールできるものを表現してもらったらいんじゃないかなと思います。

(若林委員)

私は具体だと思う、芦屋が誇れるもの。今度、チラシにもありますが吉原治良の作品も展示するわけですね。やっぱり具体じゃないかなって。

(中島委員)

チラシは字数が多すぎて、読まないですね。

(岡副会長)

このチラシは読み物にされているから、僕は、これはわざとやっていると思いますね。

(中島委員)

これ、読み物なのですか。

(石井館長)

はい、企画協力の小説家の方に文章を書いていただいております。

(中島委員)

これはどういう風に配るのですか。

(岡副会長)

普通に配ると思いますよ。リーフレットとして送るのだと思います。

(中島委員)

関心のある人は読みますよ。でも、あまり関心のない人は裏に何か書いてあるくらいにしか思わないでしょう。

(岡副会長)

わざと「オーソドックス」を変えているんですよ。百科事典にしているんだと思いました。面白いと思いましたね。ただ、作品が並ぶのかなという話。2段掛け3段掛けすればいいと思いますよ。こういうことをやってみればいいと思うんですよ。あと、小出檜重のアトリエは喫茶店の付属物みたいになっている。大坂城の置き捨てられた、忘れられた「残念石」なんかも、オブジェなんだけど「これはこうだ」といって解説して見れば、跡が見えますよね。そういうものを含めて、もうちょっと見直してみれば。今後改修のことが出てくるでしょうから、トータルにこの美術博物館を魅せるということ。環境整備も含めてですけれどね。やっぱり美術は、小出檜重と具体、これは動かないけれども、歴史は何かというと、伊勢物語であり、芦屋釜もありますし、名品がたくさんあり

ますから。

(中島委員)

そういうことを訴求ポイントにして、イメージにすると、お客様もまた行ってみようかなということになる気がする。我々素人からすると、誰かに紹介しようかなと思って、あそこに行ったらこれがあるよってという感じのイメージのものができれば。もっとたくさんのお客様が来てくれる気がするんですよね。

(藪田会長)

飯尾委員どうですか。

(飯尾委員)

10 万年前のナウマンゾウの化石から昭和まで非常に多彩なのですが、わかりやすく展示されていまして、非常に丁寧な展示をされているなと思いました。パネルの中に写真を入れてわかりやすく、それぞれのものについて説明をされていて、興味深く拝見いたしました。岡副会長が言われていたみたいに、どこに視点を置くのかということがやはり難しいなと思っています。コロナ後の美術館や博物館を想像するに、リアルとバーチャルが共存していくというようなことになろうかと思いますが、美術館博物館の空間はリアルに出会う場所で、バーチャルというのはホームページとかいろいろな機器がありますので、そこで情報的なところを提供していく、思い切ってリアルとバーチャルを使い分けるのもありかなと思いました。例えば、展示においては難しい字数の多いパネルを思い切って省略して、詳しくはホームページでというような形で、もう少し小学校 2・3 年生か、10 歳か 11 歳、12 歳かもわかりませんが、それぐらいのお子様の視点で展示し、詳しいキャプションをホームページで紹介していくというような、思い切って切り捨てて整理した形の展示というものもありかなと拝見して思いました。あと、これも先ほどの岡副会長の話にもあったんですが、歴史の展示は著作権の処理がいりませんので、例えば鶏形埴輪なんてすごく可愛いので、ああいうものをキャラクター化して、埴輪ちゃんをご案内しますみたいな形で案内していくとか、そういう風な工夫も歴史の展示においては非常に活用できるのかなと思いました。興味深い展示で自分の地域についての知識ですとか、関心とかこの展示を通して伝えていけると思っていますので、こういう歴史的な展示があるということは、やっぱり重要なことかと思えますし、具体と小出も重要ですけども、基本的なことを押さえておられるのは重要だと考えます。

(藪田会長)

では、僕からも一つ。2016 年、2019 年、2020 年の歴史展示等の展示リストをつけていただいていますけども、会下山遺跡も含めて考古資料を入れるか入れないかで、全然雰囲気が違うと思うんですよ。だから、2019 年のリストの伊勢物語の辺りから始まる資料、おそらくほとんど紙資料、その中で展開されていくということだと思いますが、地下に埋もれているものは次元が違う。それを同じ次元で並べるといのはそもそも成り立たない。だから、兵庫県は考古博物館と歴史博物館と分けているわけです。考古博は、何万年の中でどう変わったかの話をしているわけなので、そんな時間軸が違うところが一つのテーブルに並んでも普通はわからない。なので、わかるようにするにはどうしたらいいのか、ということを考えなければならない。僕は時間軸じゃなくて、おそらく地

表軸だと思うんですね。打出の地区はどう変わってきたか、芦屋川はどう変わっていったのか、という形で土地についての歴史としてどう変化してきたかを示す。

年表にしてしまったら、期間が長すぎて誰も分からないです。例えば平安時代の伊勢物語から今までだったら、まだ時間的に繋がるかもしれない。しかし会下山遺跡みたいに、2万年前で、高地性集落とかっていう、難しい言葉が入ってくる世界まで並べてしまうと分からなくなる。それはそれとして処理すべき問題なので、歴史時代の展示をきちっとすることと、考古を含めた時代の展示をきちっとやるのとのを、安易に共存させない方がいいと思います。それぐらい芦屋の埋蔵遺物というのは、この超近代化した世界の中でよくあれだけのものが出て来たなというようなものが出てくるわけです。芦屋には、ものすごく近代都市文明的なものと、地下から出てきている2万年、3万年ぐらいの前の遺物が共存しているわけです。その共存は同じ時間幅では理解できない。理解できるのは、同じ芦屋という地域から出ているということしか理解できないです。それを時間軸で並べようとしたって無理です。

兵庫県なんて五国もあると、絶対に時間軸では並ばないですよ。但馬は但馬の時間があるわけですから。それと一緒に、ここだって小さな世界ですけど、時間の幅がものすごく長いわけですね。なので、展示をやる時には、現在住んでいるところのどこに関わっている話なのかっていう地点がわからないと、子ども達が迷子になるじゃないですか。例えば水車絵図の芦屋川が分かれているのは、星野委員に教えてもらった開森橋のあたりということで、今、人が住んでいるすぐそばのところに日本最大の水車があった。そんな山奥じゃないですよ。そんなこと、教えてもらわないと僕にもわからない。だから、それは今「どこにあるの」ってことです。

要するに、地表の上に繋がっていった歴史がある。そして地表の上でしか理解できないわけです。勉強では理解したとしても、子どもたちの頭には入らないですよ。まして小学3年生で学ぶ昔は、昭和時代の昔でしょ。小学校5・6年で歴史が始まるわけじゃないですか。そうすると、旧石器まで行くわけですよ。3年生と5年生に見せるのでは、まったく違う時間枠で教科書は作られているわけです。だけど、芦屋の子ども達は「芦屋の子」として歴史を学ぶわけじゃないですか。芦屋という舞台のなかで、日本の歴史がどのようにして積み重なってきたかというところを教えてもらわないと、芦屋で日本の歴史を学ぶ意味ないでしょ。その工夫がいるんです。例えば、会下山遺跡は国指定史跡ですけど、どこの遺跡と同じ時代のものですかという説明がないから、よその県から来た人にもわかりません。市外の人にも市内の人にも、非常にわかりにくい。だけど展示されているものはいい、というのが僕の意見です。もっと徹底して芦屋の子ども達に、芦屋の中で日本の歴史の動きや時代の変化がわかるようにするにはどうしたらいいかを議論したほうがいい。

当館は、一方で美術を持ち、一方で歴史を持っておられますけど、美術は感覚に訴えるところがあると思いますけれども、歴史って感覚に訴えられない部分が多い。縄文のビーナスが、如何に美術的にいいって言ったって、そうでない縄文の遺物もいっぱいあるわけで、あれだけで議論できないわけです。やっぱりそこは、縄文時代の世界観の中にビーナスも位置付けないと、それだけ取り出してビーナスはすごいなと言っていたって、日本人の縄文観はわかりません。

歴史の座標軸ってどういう立て方をしたらいいのか、美術の座標軸ってどういう立て方をしたらいいのか、それは岡副会長がおっしゃっていたことも含め考えてみたらいい。2つの座標軸をしつかりと立てないといけない。相当これは難しいですが、成功している例は大阪に1件あるんです。それは難波宮と大坂城です。同じ土地の上にあるから、説明しやすい。目の前に大坂城があり、その下に難波宮が有ることはデジタルで表現される。ひとつの地表の上に重なって、古代の首都と天

下人豊臣の城下がある，そこで一瞬にして数百年の世界が理解できる。それはあそこに，二つの場所が重なっているから，ものすごく説明しやすい。それがバラバラになると，本当に説明しにくい。移動しないとわからないから。芦屋の場合、会下山遺跡と芦屋廃寺の2大拠点はあるわけですから、それ以外のところを，どの様に積み上げてきて，現代の具体の世界まで，芦屋の地表の上に歴史が重なってきたように説明できるかだと思います。

(岡副会長)

結局，一人の人間の頭脳で，歴史展示を全部やり上げてしまうのは，非常に難しいことであるということですよ。教育的な視点とか誰をターゲットにしているのか。誰に読ませるのか，年寄りに読ませるなら字が小さいですよと，そういうこともですけど。藪田会長は総合的な博物館学的な本質をおっしゃっていて，一人の学芸員がこの展示を全部総合的にやるってスーパーマンみたいな人はいない。それだけ歴史展示は難しいんであって，委員の皆さんの意見や第三者の意見，いろいろな人の意見を総合しながら歴史展示は作らないと。結局，みんなで喧々諤々やらないと新しい進化した展示はなかなか難しい。水車のことに関しては，おっしゃったように，長い長い樋を引っ張ってきて，それで水車小屋まで持ってくるという，アナログだけど，すごいっていうあの絵図面の面白さをもっと解説して，それが醸造につながって現代の酒造りにつながっていくとか，もう少し切り捨ててフォーカスするところを作られたらもっと面白い展示になるだろうと思いました。ちょっと水車のところがやっぱり物足りない。それを楽しみに行ったんだけど，これを理解できるのかなというのは，思いました。それと，お屋敷文化というか，ハイカラ文化というか，ハナヤ勘兵衛にしたって出てくるのは文壇たちの文化的な余暇，レジャーというかそういうものの邸宅文化みたいな，芦屋の外に根ざす，東灘文化，西宮文化と違う，「芦屋は芦屋だ」というのが市長さんのお考えだと思うので，それを僕だったらもうちょっと見たい。邸宅文化というものをね。そのほうが満足度が高いのかと。藪田会長には熱く語っていただいて，僕も目から鱗が落ちました。藪田会長のおっしゃっていることは大阪歴史博物館の展示を僕も一緒に委員としてやっていましたんでよくわかります。

(若林委員)

前に市役所の1階の一部でやりましたね，芦屋の邸宅の写真展示みたいなもの。キャプション付けて。あれをもうちょっと膨らませてやるとかね。今のお話を伺っていたら，時系列に並べるっていうことじゃなくて，一時代のここっていうところをボリュームアップして見せるっていうのがなんとなく，人目を引きそうな。なんかそんな風に聞こえました。だから今のところ，欲張ってとは言わないけれど，「ここまでやらないといけないよね」という感じでずらっと並べたという感がぬぐえないのかもしれないね。特化して，ちょっとボリュームアップして見せるとか，そんなことでもいいのかも说不定ね。

(藪田会長)

例えば神戸の博物館がリニューアルされましたね。一番大きなリニューアルは，常設のリニューアルなんですね。その時非常にはっきりしたのは，神戸で語られるテーマと，全国で語るテーマとがある。神戸では，ザビエルがそうなんですね。ザビエル像は，神戸の人であっても，全国の人であっても知って欲しい。同じように桜ヶ丘銅鐸は全国の人に知ってほしい。だからこの二つは，通

史のなかには入れず、特別に独立させたわけですよ。神戸の人であろうとなかろうと、これは日本の歴史上、重要性を持つものだから、桜ヶ丘銅鐸とザビエルにしたわけですよ。

同じ事を芦屋でもできるはずなんですよ。会下山遺跡は会下山遺跡としてここから出た、芦屋かどうかは関係なく日本を代表する高地性集落としてこれだけ素晴らしいものが瀬戸内海のすぐそばにあった。それを一般の歴史の中で埋めようとされるから無理が起こってくる。かつて神戸も同じことをやっていたのが、今回は独立させたんです。

また神戸市立博物館では、阪神大洪水の展示を大きく取り上げています。近年の災害の中で、阪神大洪水を高く評価する考えが出てきていると思います。そういう他のところがやっておられること、伊丹や西宮がどうしているのか研究をされて、他所とも比較しながら芦屋バージョンを作っていられることが、大事なことだと思いますけどね。

(藪田会長)

今回歴史展示ということでいろいろ意見がありましたが、石井館長の方から何かございますか。

(石井館長)

いろいろとご意見いただき、ありがとうございます。歴史をメインテーマとしては初めてでした。今日もたくさんそれぞれのご意見をいただけたので、いろいろご意見を伺いながら新しい展示を目指していきたいと思います。ありがとうございます。

(藪田会長)

事務局から何かありますか。

(事務局：長岡課長)

事務局からは特にございません。

(岡副会長)

最後に少しいいですか。いろいろご意見ございましたけど、私は非常に期待します。特に次回の展覧会、いっぱい並べてください。具体と小出櫓重と、開館当時、小出櫓重はある程度有名なところに収まってしまっている状態でしたから、なかなか集まらなかったんですけども、それでも、具体は作家が寄贈と後援があってコレクションが集まってきて、それはもうかけがえのないものであって今から追いつけないものなので、ほんとに宝です。それをいかに守って伸ばすかということで、これだけのものがありますという蔵ざらいを改修前にやられて、いろんな人に理解をしてもらって、雑多かもしれないけども、2段掛け、3段掛けにして、これだけのものがあるんだよと市民に知らしめるいい機会だろうと思います。ポイントは全部ここに入っているんです。図版もね。この図版もシャープだし、結構だと思います。ですから、非常に期待しておりますので、1回といわず2回3回みんなに見てもらったらいいと思います。それで、僕はできるだけ陳列替えはしない方がいいと思います。いつ行っても見られるというほうが。陳列替えはするんですか。

(石井館長)

今はまだちょっと調整中です。

(岡副会長)

またここに来て見ようと思ってもらえるほうがいいと思います。全部がらっと変えてしまうような陳列替えするとお金もかかるし、サロンみたいにかけて。

(石井館長)

今回は点数がなかなか多いので、全ての展示替えはしないと思います。

(岡副会長)

この美術博物館の問題点は、建物は立派なんだけど展示スペース、壁面が少ないんです。だから並べきれないんですね。また、階段がすごく問題になって、上に上に上がって行くんだけど、そこに展示すると、どうしても単体で孤立しちゃう。繋がらないんですよ。それは、なんとか活かしながら、建物全体を飾るようなインスタレーションのつもりで陳列をされたらいいかなと思います。これは、私の勝手な意見ですけれども。期待しております。

(藪田会長)

ありがとうございました。これにて本日の協議事項がすべて終わりましたので、閉会とします。お疲れ様でした。